

日蓮大聖人御書全集

みようほうあまごぜんごへんじ

妙法尼御前御返事

りんじゅういちだいじ こと

(臨終一大事の事)

みようほうあまごぜんごへんじ

りんじゅういちだいじ

こと

妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）

こうあんがんねん

がつ

にち

さい

みようほうあま

弘安元年(78)

7月14日

57歳

妙法尼

ごしようそく

い

妙

法

蓮

華

經

夜

昼

御消息に云わく「みようほうれんげきょううを、よるひるとなえまいらせ、すでにちかくなりて、二声こうしよう

ふたこえ

高

声

白

となえ、乃至いきて候いし時よりも、なおいろもしろく、かたちもそんぜず」と云々。

唱

ないし生

そうら

とき

色

白

形 摂

かたちもそんぜず」と云々。

ほけきよう

い

によぜそくないしほんまつくきょうとう

うんぬん

だいらん

い

法華経に云わく「如是相乃至本末究竟等」云々。大論に云

りんじゅう とき いろくろ

じ

じ

じ

お

とううんぬん

しゅ

きょう

わく「臨終の時に色黒きは、地獄に墮つ」等云々。守護経に

い じごく お

じ

じ

そ

とううんぬん

しゅ

きょう

云わく「地獄に墮つるに十五の相、餓鬼に八種の相、畜生

ごしゅ そう とううんぬん てんだいだいし まかしかん い
に五種の相」等云々。天台大師の摩訶止観に云わく「身の
くろいろ ジデイーく おん たと とううんぬん
黒色は地獄の陰を譬う」等云々。

そ おも にちれんようしよう とき ぶつぼう がく そら
夫れ以んみれば、日蓮幼少の時より仏法を学し候いしが、
ねんがん ひと じゅみよう むじょう いき い ま
念願すらく「人の寿命は無常なり。出づる氣は入る氣を待つ
ことなし。風の前の露、なお譬えにあらず。かしこきも、は
無 かぜ まえ つゆ たと 賢

わか さだ な なら
かなきも、老いたるも、若きも、定め無き習いなり。されば、
無

なら のち たじ なら
まづ臨終のこと習つて後に他事を習うべし」と思つて、
いちだいしようぎよう ろんじ にんし しょしゃく 粗 々 勘 集
おも

一代聖教の論師・人師の書釈あらあらかんがえあつめて、
いつさい しょにん とき

これを明鏡として一切の諸人の死する時とならびに
みよしきよう

りんじゅう のち

見 そら

ひ む

見 そら

曇

臨終の後とに引き向かえてみ候えば、すこしもくもりなし。

し。

この人は地獄に墮ちぬ、乃至人天とはみえて候を、

せけん ひとびと

お

い

ほ

じょう

ふ

ぼ

と

りんじゅう

そ

う

じゅう

そ

う

る

う

う

う

う

う

う

う

世間の人々、あるいは師匠・父母等の臨終の相をかくして、

さ

い

ほ

う

じょ

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

西方淨土往生とのみ申し候。悲しいかな、師匠は惡道に

おお く 忍

でし

留

居

し

堕ちて多くの苦しのびがたければ、弟子はとどまりいて師

りんじゅう

讀

歎

く

忍

く

忍

く

忍

く

忍

く

忍

く

忍

く

忍

く

忍

く

忍

く

忍

く

忍

く

の臨終をさんだんし、地獄の苦を增長せしむる。譬えば、

罪 深 もの くち 塞

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

つみふかき者を口をふさいできゆうもんし、はれ物の口を開

病 く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

く

あけずしてやまするがごとし。

いま

ごしようそく

い

生

そら

とき

しかるに、今の御消息に云わく「いきて候いし時よりも、

色 白

形

攝

うんぬん

てんだい い

なおいろしろく、かたちもそんぜず」と云々。天台云わく

びやくびやく

てん たと

だいらん い

しゃくびやくたんじよう

もの

「白々は天を譬う」。大論に云わく「赤白端正なる者は

てんじょう

う うんぬん

てんだいだいしごりんじゆう き

いろしろ

い

いろしろ

天上を得」云々。天台大師御臨終の記に云わく「色白し」。

げんじょうさんぞうごりんじゆう

しる

い

いろしろ

いちだいしようぎょう

さだ

玄奘三蔵御臨終を記して云わく「色白し」。一代聖教の定

みょうもく

い

こくごう

ろくじゅう

留

めんじょう

げんじょう

はくごう

しそう

まれる名目に云わく「黒業は六道にとどまり、白業は四聖

もんじょう

げんじょう

勘

そうちろう

となる」。これらの文証と現証をもつてかんがえて候に、

ひと てん しょう

この人は天に生ぜるか。

ほけきょう

みょううごう

りんじゅう

にへん

唱

うんぬん

はたまた、「法華経の名号を臨終に二反となう」と云々。

ほけきょう

だいしち

まき

い

われめつど

のち

法華経の第七の巻に云わく「我滅度して後において、応に

まさ

きょうじゅじ

ひと
あつじ

けつじょう

この経を受持すべし。この人は仏道において、決定して
疑いあることなけん」云々。一代の聖教、いざれもいざ
れもおろかなることは候わず。皆、我らが親父・大聖・
教主釈尊の金言なり。皆眞実なり、皆実語なり。その中に
おいて、また小乗・大乗、顯教・密教、權大乗・實大乗
あいわからて候。仏説と申すは、二天三仙の外道、道士の
経々にたいし候えば、これらは妄語、仏説は実語にて
候。この実語の中に、妄語あり、実語あり、綺語も悪口も
あり。その中に、法華経は実語の中の実語なり。眞実の中の

しんじつ しんごんしゅう けごんしゅう さんろん ほつそう くしゃ じょうじつ
真実なり。真言宗と華嚴宗と三論と法相と俱舍・成実と
りつしゅう ねんぶつしゅう ぜんしゅうとう じつご なか もうご た い
律宗と念佛宗と禅宗等は、実語の中の妄語より立て出だ
しゅうじゅう ほつけしゅう しゅうじゅう 似 た
せる宗々なり。法華宗は、これらの宗々にはになるべく
じつご ほけきょう じつご いちだいもうご
もなき実語なり。法華經の大海上に入りぬれば、一代妄語の
きょうぎょう ほけきょう たいかい い
經々すら、法華經の大海上に入りぬれば、法華經の御力に
責 じつご そうちらう ほけきょう おんちから
せめられて実語となり候。いおうや、法華經の題目をや。
おしおい ちから うるし へん ゆき しる
白粉の力は、漆を変じて雪のゴとく白くなす。須弥山に
ちか しゅしき みなこんじき ほけきょう みようごう たも ひと いつしよう
近づく衆色は、皆金色なり。法華經の名号を持つ人は、一生
ないしかこおんのんじゅう こくじゅう うるしへん びやくじゅう だいぜん
乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。

況

むし

ぜんこん

みなへん

こんじき

そうろう

いおうや、無始の善根、皆変じて金色となり 候なり。

こしようりよう さいごりんじゅう なんみょうほうれんげきよう

唱

しかれば、故聖靈、最後臨終に南無妙法蓮華經ととなえ
させ給いしかば、一生乃至無始の悪業変じて仏の種となり
給う。煩惱即菩提・生死即涅槃・即身成仏と申す法門なり。

かかる人の縁の夫妻にならせ給えば、また女人成仏も疑い

なかるべし。もし「こと」と虛事ならば、釈迦・多宝・十方分身
の諸仏は、妄語の人、大妄語の人、悪人なり。一切衆生を

たばらかして地獄におとす人なるべし。提婆達多は寂光
淨土の主となり、教主釈尊は阿鼻大城のほのおにむせび

じょうど

しゆ

きょうしゅしゃくそん

あひだいじょう

炎

咽

たも

給うべし。

にちがつ ち お

だいち

覆

かわ さか

まに流れ、須弥山はくだけおつべし。日蓮が妄語にはあら

なが

じつぼうさんぜ しよぶつ もうご

砕

落

にちれん もうご

にちれん もうご

ず、十方三世の諸仏の妄語なり。いかでか、その義候べ

覚

そうちら

くわ

げんざん

ときもう

そうちらう

きとこそおぼえ候え。委しくは見参の時申すべく候。

しちがつじゅうよつか

にちれん

かおう

七月十四日

日蓮

花押

妙法尼御前申させ給え。

みようほうあまごぜんもう

たま